



書評

[評者]

河村 満

奥沢病院名誉院長/昭和大学
名誉教授・脳神経内科

精神神経症候群を読み解く

精神科学と神経学のアートとサイエンス

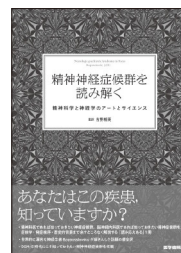
吉野 相英 監訳

高橋 和久, 竹下 昇吾, 立澤 賢孝 訳

●B5 頁256 2020年6月

定価: 本体8,000円+税

[ISBN978-4-260-04232-1] 医学書院刊



大学勤務から一般病院での診療中心の生活に変わり、以前には気付かなかったことの重要性を感じることができるようになった。脳神経内科医としてスタートした40数年前には、私たちの診療科がどのように独立性を主張することができるのかが大きな問題点であった。しかし、それはたぶん日本中どこでもクリアできたように感じる。一方現在、脳神経内科医が増えて地域の病院で診療をするときの問題点は2つあると思う。1つは脳神経内科医が一般内科の知識・技術などのスキルをもっとアップさせる必要があるということであるが、こちらは日本神経学会や日本神経治療学会などでさまざまな対応がなされつつある。第2の問題は脳神経内科との、一般内科とは対極にあるもう1つの境界領域である精神科の知識を増やし、診療技術を獲得する必要があるということである。

このためにも、非常に推薦できる本が出版された。

防衛医大精神神経科吉野相英先生監訳の『精神神経症候群を読み解く—精神科学と神経学のアートとサイエンス』である。原本は、2018年にKarger社から2冊の本として『Neurologic-Psychiatric Syndromes in Focus』というタイトルで出版された。原本監修のBogousslavskyは脳神経内科医で、もともと脳卒中の神経症候学と臨床神経心理学に詳しく、最近では神経学の歴史に関する多くの著作がある。翻訳では2冊の原本を前半と後半に分け1冊の合本として出版された。そのために英文原本2冊を購入する場

合よりだいぶ格安になっている。

内容は第1部が神経症候群で、相貌失認、過剰書字、病的あくびなどの神経学・神経心理学的症候で、脳神経内科診療の中で時々遭遇する、しかし不思議な症候が満載である。第2部が精神症候群で、的外れ応答を際立った特徴とするGanser症候群、「自分は死んでいる」というCotard症候群などが含まれている。これらの多くは医療関係者であっても初めて聴く症候かもしれない。私自身もグルメ症候群、切断欲求などの存在はこの本を読んで初めて知った。さらに、宗教への傾倒やヒステリーについての記載もあり、医学書としてはかなり挑戦的な内容が含まれている。ちなみに、この本の最後は「不思議の国のアリス症候群」という、有名文学作品からつけられた症候で終わっている。これら症候の歴史的な観点からの詳細な記述に加えて、最新の脳科学的分析が、どちらも対等に大切なものとして記載されているのがこの本の大きな特徴である。図も豊富に掲載されていて楽しめる。本の装丁もセンスがよい。

この本は、“人の本来ある姿を神経学・精神医学から探るための本”ともいえると思う。もともと医学は“人の病を治し”、“人を癒し”、さらに“人の本来ある姿を探る”学問領域である。“人の病を治す”ための医学書は多く、脳神経内科や精神科領域の本では“人を癒す”ための本もときどき見かける。しかし、“人の本来ある姿を探る”本は医学書ではあまり見かけない。本書はこのことに役に立つ稀有な本であると思う。